

研究通信

No. 30

1958.12刊

村落社会研究会
事務局

東京都文京区小石川町
1の1

中央大学文学部
社会学研究室

し込んだ。

あければ七日、東北の朝はもうかなり冷たいが、五時半に家を出た。かくして予定より三十分遅れて九時半開会の挨拶が事務局によつてなされ、ただちに研究報告にはいった。

VI回 年次大会記

一〇月七、八日

鳴子温泉「農民の家」にて

第六回大会は全員期待の裡に、十月七・八四日、宮城県鳴子温泉「農民の家」で開催された。この大会は出席者全員の宿泊を予定した大胆な試みであり、しかも開催地が仙台よりさらに「一時間以上北上する鳴子であるためもあって、はたしてこれだけの会員が出席できるかと開催者は相当やきもきしたものであつた。それだけにアンケートなどによつて確実な出欠をたしかめるなどかなり慎重な配慮がなされ、事務局と世話係の東北大學関係会員とのあいだには幾度も手紙・電報による連絡がおこなわれた。

ところがいざ会を開いてみると、六日昼頃から、南は鹿児島が参集はじめ、同日夕刻までに三一名が「農民の家」に旅装をとどけ、北は札幌から、文字通り全国津々浦々から、ぞくぞくと会員が参集した。その夜は、主催者側の好意による熱湯に疲れをいやしながら、一年振りの微笑が全員の気持をはやくも同志的緊密感のなかにとか

と頗して東北大経済史グループを代表して島田氏が共同研究実施中の煙山村と今井村について、労働・水利・山林等々の共同組織について詳細な資料を提出し、先進地調訪農村と後進地東北農村の共同体的性格の相異を論究した。

ついで東北大経済学グループを代表して菅野後作氏が「明治以降の東北農村の村落構造」の題名の下に、水田地帯と畜業地帯の村落結合の差異を明快な論調で指摘され、とくに会場鳴子がその対象であるだけに、きわめて興味深いものがあつた。

さらに司会は木下氏に交替し、余田氏が「農業村落共同体の基礎構造」と題して、主として宝塚市の村落を材料として共同体の論理ようやく足腰の疲勞を感じる頃、昼食・休憩となり、「同ねもわず

午後一時半報告再開。遠来の山岡氏が「新田地帯における村落共同体」について、中村氏司会のもとに、現象形態としての共同体的規制からその本質に迫るべく、島根地方の新田村落をとり上げて所説を展開した。

つぎに内藤氏司会の下に中野氏が「能登灘浦の村落共同体組織とその変化」と題して、明解な図表とともに多年手がけられた能登北大畠村の共同組織からダイナミックな論述をおこなつた。

中野氏に統いて竹内氏が「漁場と村落」の下におなじく漁村における共同体の性格を追及した。(司会米林氏)。

この間、質疑応答が次第に活発になり、時刻は少しづつおくれ、五時半こし前になつて第一日の報告を終了した。引続いて総会には、木下氏を座長に選出。事務局より、一年間の事業報告・会計

報告がなされた。ついで審議事項にはいり、次年度課題、大会開催地・新事務局担当大学などについて審議されたが、共同課題の決定は翌日まで延期された。これらについては後記の総会決定事項を参照して頂きたい。

総会後に懇親会が行われたが、秋の夜長をドチラ姿で飲みかわす酒は予想以上にうまく、話ははずみ、ついにはお腹自慢の一聲もある程となり、一同大喜びであった。懇親会の目的基礎は宮城県農業団体連合会と七十七銀行の好意による多額の寄附金であつた。われわれはそのための労をとられた木下・中村両会員はじめ東北大的関係者に感謝しなければならない。懇親会終了後有志の歓談ではなお結果とおり、正十二時解散。風聞するところでは更に一時間延長されたとか。

さて翌八日、昨夜の疲れ(?)にもめげず、九時二十分報告開始となり、まず大山氏司会の下に、布施義治氏が「北海道におけるムラの形成過程からみた共同体的規制について」と題して北辺の開拓

村における共同体の在格の形成について詳細な報告を行つた。ついで喜多野氏司会の下に蓮見音彦氏の「都市近郊農村における村落共同体の問題」が水利問題を中心として展開された。

報告の中村氏はついに出席できなくなり、午後に予定された原宏氏が「刈馬与良郷村の社会構造」について宗派關係から論及された。(竹内氏司会)

かくして十二時三十分一切の報告を終了。休憩。司会者同打合せが行われた。

ついで二時三十分より有賀、喜多野両氏のもとに共同討議が開始された。今年度は前年テープコーダーによる録音が失敗した経験からのでとくに録音について慎重に取扱つた。これは現事務局において再生の上会員にお送りする予定でいるので、その内容はそれにゆする。この討議は夕食休憩ののち、七時から再開され、九時まで続けられた。かくして村研第六回大会は盛会裡に幕を閉じたわけである。

(前事務局記)